

漢法苞徳塾資料	No. 097
区分	疾病論・病証論
タイトル	五臓の五邪相干の病証表
著者	八木素萌
作成日	

五蔵	虚邪	正邪	実邪	微邪	賊邪
肝	風寒相合、木慮腎恐、拘急自汗、其脈弦緊而沈。仲景云、風感太陽、移証在太陽經中、 桂枝加附子湯 主之。 水	中風、目眩頭重、叫怒不咄、脈弦緊而長。仲景云、甚則如癰為瘥。宜 羌活湯 。小兒為癰、大人為瘥。 木	風熱相合、風性急、火搖動焰而旋轉、其脈弦而緊洪。風熱發狂、宜 芎黃湯 。 火	風湿相合、体重節痛、臟腑洞泄、脈弦長而緩。仲景云、身体疼痛、下痢清穀、急当救裏、 四逆湯 主之。 土	風燥相合、血虚筋縮、皮膚皴揭、脈弦浮而濇。仲景云、血虚筋急、 桂枝加瓜蒌湯 主之。 金
心	熱風相合、妄聽妄聞耳簫声、胆与三焦之經同出于耳、『銅人』云、刺閼衝出血、瀉支溝、脈浮大而弦、初 小柴胡湯 後 大柴胡湯 。此証是太陽与少陽之病、前客後主也。 木	熱也、脫陽見鬼、躁擾狂起、脈洪実、一呼四至、是八至脈也。 小承氣湯 主之、謂復不堅大也。 火	湿熱相合、憤々心煩、熱蒸不眠、脾經終于心、心經起于心、心脾二經相接、故為湿熱、脈浮大而緩、足太陰寄証在手太陽、宜 梔鼓湯 。若痞、 加厚朴、枳実 。 土	熱燥相合、過飲歌樂、実為熱燥、俗言暢飲也、病人曰、快活、快活、是有声于歌樂也。以意思漿、是無声歌樂也。脈洪大而濇、 白虎湯 主之、喘則 加人參 。 金	熱寒相合、胆傷、心懸如飢、神怯恐怖。足少陰与手厥陰相接水中、心經守邪、故神怯怖耳。脈大而沈濡、亦在太陽經中。『内經』曰、心虚則熱發于内。 黃連附子瀉心湯 主之。法云、熱多寒少、以為佐矣。如寒多熱少、 加附子、乾姜 佐之。 水
脾	湿熱相合、熱陷胃中、腸癖下血、脈中緩。 大黃黃連解毒湯 主之。 火	湿自病、腹滿時痛、手足自温、其脈沈濇而長。虚痛、 桂枝加芍藥湯 主之、実痛、 桂枝加大黃湯 。 土	湿燥相合、胃中燥屎、腹滿堅痛、其脈緩而長濇、是正陽陽明証也、 調胃承氣湯 主之。 金	湿寒相合、湿与寒交、寒来求湿、身黃而不熱、体重而不渴、謂之寒湿、其脈緩沈而滑、 朮附湯 主之。如小便不利者、 加茯苓 。 水	湿風相合、嘔逆脇痛、往来寒熱、脈緩而弦長、 小柴胡湯 主之。 木
肺	燥湿相合、微喘而痞、便難而痰、其脈浮濇而緩、 枳実理中丸 主之。如喘甚、 加人參 。苦便難、 加木香、檳榔各半錢 、為極細末、煎下 理中丸 。 土	燥自病、其氣奔鬱、皆属于肺、諸燥有声、其脈浮濇而短、列諸 嗽藥 、選而用之。 金	燥寒相合、毛聚皮凉、洩多而清、其脈短濇而沈。此証如秋冬、宜 八味丸 、若春夏、宜 地黃丸 。 水	燥風相合、皮著甲枯、血虚氣虚、二臟俱虚、先血後氣、其脈浮濇而弦、久 養氣血藥 主之。 木	燥熱相合、鼻塞衄衄、血溢血泄、其脈濇而浮大。甚者、 桃仁承氣湯 、微者、 犀角地黃湯 。極者、 抵当湯 、微極、 抵当丸 。 火
腎	寒清相合、腎唾多呻、洒淅寒清、無寢。『經』言、燥化清。其脈沈実而濇、 酸棗仁湯 主之。 金	寒自病、寒憤用臟、黑痺經沈、其脈沈濡而滑、黑痺、 天麻丸 。如証同脈異、微者、腑病也、甚者、臟病也。 水	寒風相合、臟不藏散、下痢純清、其脈沈滑而弦。仲景云、少陰証、口燥咽乾、下痢純清、 大承氣湯 主之。脈沈弦而遲、四肢逆冷者、宜 四逆湯 等。 木	寒熱相合、膀胱熱鬱、津液枯少、其脈沈濡而大。『内經』曰、水少乾涸也。 猪苓湯 主之。 火	寒湿相合、腎為胃関、関閉水溢、関閉不利、水在胃為腫、水在肺為喘、及變諸証、其脈沈緩而大。仲景云、大病差後。腰下有水氣者、 牡蛎沢瀉湯 主之。 土

註：李東垣『医学発明』に「五邪相干」に関する論がある。ここの「五邪」概念は明白に『難経』50 難の概念に従っている。それを「肝病」を例として見ると、「虚邪」は冬の「寒冷(中湿と記述されている)」に冒された病、「実邪」は夏の「暑熱」による病、「正邪」は春の「風」による病、「微邪」は長夏の「湿」や「飲食劳倦」による病、「賊邪」は秋の「涼燥(傷寒と記述されている)」に「肝」が冒された病、となっている。このように病因の五行が病蔵の五行に対する位置が、「親」(虚邪)・「同」(正邪)・「子」(実邪)・「剋される側」(微邪)・「剋している者」(賊邪)となっているのである。そして「病蔵の五行」と「病因の五行」の位置関係を確認することは、「予後判断」上で極めて重要なものと、『難経』では認識している(13 難他)のである。